
Concerto

桜星 雨夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Concerto

【Nコード】

N2492B

【作者名】

桜星 雨夜

【あらすじ】

生まれながらの罪人、異端故の墮天、翼を奪われた悪魔。三者は出会い、運命は動き出す。

Prologue

それは、少し昔の話です。

子供を身ごもった一人の天使がいました。

彼女は父親が誰かを全く周囲に言おうとしない為、不思議がられていました。

その彼女が生んだ子供は、生まれてはならない存在でした。

右の瞳は金色、天の象徴。

左の瞳は闇色、魔の象徴。

右の翼は漆黒、魔の象徴。

左の翼は純白、天の象徴。

髪の色は真紅、罪人の証。

子供は、天使と悪魔のハーフだったのです。

母親となった彼女は、裁判にかけられる事となりました。

天使が悪魔と交わるのは天界では最も重い罪なのです。

交わった悪魔の名を言えば、無理矢理の行為だったのだと言えば減刑してもらえるかもしれない。

彼女と親しい天使達が口々に彼女に言いました。

しかし、彼女は頑なに口を閉ざし、首を横に振り続けるのみでした。

裁判の日。

彼女に下される判決はもう確定しているも同然でした。

裁判が進められていく中、彼女は何も言葉を発しませんでした。

刑が言い渡される直前、彼女はやっと口を開きました。

「私が愛した人がたまたま悪魔だっただけです——あの人私は私があの人の子供を産んだ事も知らない。

後悔などはしません。あの人を、悪魔であるのだとしてもあの人を愛せた事を私は誇りに思います」

言い渡された刑は、極刑。

彼女は、存在する事すら許されず消滅しました。

さて、彼女が消滅刑に処された後、天界にはもう一つ問題が残って

いました。

子供の処遇です。

天の象徴と魔の象徴を併せ持つその子供は、存在自体が罪でした。しかし、子供自身が望んで罪を犯した訳ではありません。

故に、処遇は定まりませんでした。

幾度も幾度も、討議が重ねられました。

その間、子供は誰の目にも触れぬよう独房に閉じ込められていました。

数え切れないほどの月日を、子供は独房で過ごしました。

物心がつく前から独房にいた子供にとって、独房の中が世界の全てでした。

独房の外に出る事が、子供の夢となっていました。

そして遂にある日、子供は独房の外に出ました。

子供を外に出したのは、艶やかな白銀の髪に真紅の瞳、ダークブルーの翼を持つ天使でした。

その天使の瞳の色は、墮天の証。

そう、子供を外に出したのは、罪人として牢獄に閉じ込められていた墮天使だったのです。

彼女の名前は、デスピナーザファイエル。

破壊の天使の系列に生まれた、異形の天使。

天使に有り得るはずのないダークブルーの翼。

その翼を、天使達は忌み嫌っていました。

その為に彼女に繰り返し返された非道さに、彼女は天使を憎悪しました。そして、天界の大地を天使達の血で紅に染め上げたのです。

彼女の持つ天界では最高峰と言われる剣士の腕を、存分に使って。

「飽きたっしょ、ずーっとこんなトコ。アタシが逃げるついでに逃がしてやるよ」

くすくす、と。

彼女は楽しそうに笑いながら言いました。

子供は、彼女と共に下界へと降りる事にしました。

脱獄した彼女を追う天使軍。

共に逃げた子供も同罪とされ、討伐の命が下されました。

天界の者達にとって、子供が彼女と共にいる事は都合のよい事だったのです。

天使軍と幾度も戦闘を重ね、傷だらけになりながらも二人は下界へと降り立ちました。

尚もしつこく迫ってくる天使軍から二人を助けたのは、一人の悪魔でした。

彼の名前は、エリヌスⅡメリリム。

空の軍勢の君主の系列に生まれながら、交戦した天使に術をかけられて翼を奪われた悪魔。

彼は自分に術をかけた天使を殺すため、殺戮を繰り返していました。漆黒の髪に漆黒の瞳を持つ黒き悪魔は、天使軍に追われている二人に興味を持ちました。

「お前らを追ってる天使軍は、ちょうどいい俺の獲物だ。助けてやる」

そして、三人の生活が始まったのです。

子供の名前は、カロンⅡサマエル。

天使と悪魔の間に生まれた、禁忌の存在。

1-1. 三重奏、開始

天使ってのはねえ、基本的に排他的主義なんだよ。

自分と違うモンはいらないの、皆同じがアタリマエーなんだって、アイツらは。

だから自分と違うと思ったら迫害しやがんだよ、うっとおしいよねえ。

ヒトからしたら天使ってなあ慈悲に溢れたすごいイイ感じの存在らしいじゃん。

天使はさ、慈悲なんてイイモン持ってないよ。

アイツらにあんのは正当な天使以外この世界に必要なえっつー考えだけなワケ。

だからアタシみたいな翼の色の違う天使はイラナイ。

アンタみたいな天使と悪魔のハーフなんつーのも、イラナイ。

トーゼン、バリバリ反対側のアンタみたいな悪魔もイラナイってわけよ、リョーカイ？

その日は、満月。

比較的大きめの樹の上に、カロンはいた。

葉の茂みが、ちょうどいい具合にカロンの姿を月明かりから隠す。

遙か上空で、天使軍が通り過ぎて行った。

「…デスピナとエリヌス、どこいるんだろー…」

つい先程まで一緒に居た二人の事を思う。

天使を憎む、二人。

今頃喜んで自分達を追っている天使たちを狩っているのだろう。

血生臭い事に全く興味を持たず、戦闘する気もないカロンは二人の「保護者」に隠れている事を命じられたのだった。

久しぶりに、翼を広げる。

白と黒の、対の色をした両翼。

普段はヒトに紛れて暮らす為に、翼は魔力を使って隠していて。思い切り翼を広げられるのは、こんな時だけ。

樹の幹に凭れて、カロンは瞳を閉じた。

夜風に揺らいで歌う樹の声が心地よい。

まるでここだけ別世界。

遠くで行われているであろう戦闘なんて、夢の中の出来事のように。

がさ。

風ではないものが鳴らす音に、カロンは右目だけを開いた。

黄金の色が、音を鳴らした存在を見遣る。

——映し出されたのは、天使。

「カロンⅡサマエル、脱獄罪により確保する」

「…なあーに遊んでんの、エリヌス」

はあ。

カロンの口から漏れたのは、溜め息。

次の瞬間、がしやりと音を立てて天使の身体が崩れ落ちる。

ほんの僅かだけ翼を使って、カロンは樹の下へと降りた。

月明かりが、漆黒の細身のシルエットを浮かび上がらせている。

そのシルエット――エリヌスはふ、と笑ってくしやりとカロンの髪を撫でた。

「いい子に留守番してたみたいだな」

「半分寝てたよ、退屈だし。デスピナはー？」

「気分がノツたらしい、もうちょっとやってるんじゃないか？」

「好きだねえ。エリヌスはお人形、何体増やしてきたわけ？つかまだ戦闘中？」

どうでもよさそうに問い掛けるカロンに、エリヌスは笑うだけで答えない。

その手からは、魔力で紡ぎ出された黒い糸が見え隠れしている。

傀儡術、己が殺した者を人形にしてしまう術。

先程カロンに声をかけた天使も、エリヌスの人形となった天使。

あーあ。と小さく呟いて、カロンは伸びをした。

いくら天使が死のうと、興味はない。

恨んではないけれど、庇い立てする義理もカロンにはない。

カロンにとって「大事」な存在は、デスピナとエリヌスの二人。二人が生きているのならば、何の問題もない。

「退屈だよエリヌスー。何か話してよ、ほら、魔界の話の続きっ」

「嫌だね。気が散る」

「…やっぱりまだ戦闘中なんだー、つまんないの。」

「寝とけ。終わったら構ってやるよ」

「はい」

素直に返事を返して、カロンは樹の根元に座り込んでそのまま瞳を閉じた。

エリヌスの気配が消える様子はない。

彼がいるのなら、身の安全は確保出来ているも同然だ。

天使軍に天界に連れて行かれる事は、ない。

（――…オヤスミ）

心の中で小さく呟いて、カロンは眠りの世界へと引き摺り込まれていった。

「…なんでお前はカロンと一緒に逃げようだなんて思ったんだ？」

エリヌスの問いに、蒼い翼の堕天は笑う。

酷く、酷く、楽しげに。

その手には魔力により生み出された、天使の血に濡れた剣。

細かい傷だらけの彼女の身体は、それ以上に返り血に濡れている。

「アンタさあ、それ何回目？そんな知りたいわけー？気紛れ、って事にしときなよ」

「気紛れでこんな面倒な奴連れて行くような性格してるのか、お前が。」

「嫌味な男はモテないよ？ま、元からアタシの趣味じゃないけどねん」

「それは嬉しい事で。」

「…刺し殺すよ？」

ふっと真顔で言い放ったデスピナは、次の瞬間にはけけらと笑って。

すっかり寝入ってしまったているカロンへと足を向ける。

しゃがんで、顔を覗きこんで。

柔らかく、デスピナは笑った。

「…コイツ、なーんにも知らないからさ」

「それだけ大きくなるまで独房の中にいれば仕方ない事だろう」

「あは、まーねえ。アタシにも色々あんだってー。それよりエリヌス」

「何だ？」

「アンタこそ、何でアタシら助けようだなんて思ったわけ？」

「お前達というと天使軍が寄ってくるから」

「いい餌になるから…かあ。それも聞き飽きた」

「…俺にも色々あるって事だ」

苦笑いに、デスピナは一層楽しげに笑った。

もぞ、とデスピナの目の前のカロンが動く。

デスピナとエリヌスの目が同時にカロンに向けられる。

閉じられたままの瞳。

目を覚ました気配はない。

仕方なさそうに、エリヌスは笑んだ。

「…本当に子供だな、カロンは」

「だよねー。何てか、ボセーホンノー擦られるんだよねー」

「デスピナにそんな高尚なものがあるとは知らなかった」

「ざっけんなばーか。それくらいあるっての」

言いながら、デスピナはカロンの額を弾く。

むー、と眉を寄せて、カロンがゆっくりと目を開けた。

金と黒が、光を宿す。

「あ、デスピナだー。おかえり。血まみれだよ、大丈夫？」

「大した事ないないー。帰ろっか」

にっと笑顔を浮かべるデスピナに、カロンは嬉しそうに頷いた。

風が、三人の身体を取り巻いて過ぎ去っていく。

罪人と、堕天と、悪魔。

その存在が集っている事は、必然。

紡ぎだす曲は、悲哀と憎悪を込めた三重奏。

1-2. 異質であるが故の墮天

天使という存在の色は、基本的な箇所は全て同じだ。

美しく艶やかなプラチナブロンドの髪。

煌きを閉じ込めた金の瞳。

そして、汚れない純白の翼。

それ以外の色を持つ者は、「異端」。

——天使とは、見做されない。

天界における天使軍の中で、生まれながらにして突出した力を持つ一族がいる。

破壊の天使の別称を持つ一族——ザアフィエル家。

そこに、一人の子供が生まれた。

プラチナブロンドの髪。

金色の瞳。

それは、天使に違いがない色をしていたけれど。

ただひとつ——何故か、翼はダークブルーに彩られていた。

「ダークブルーは宵の色。陽の存在である天使には有り得ない色だ。この子は呪われているに違いない」

そう言い出したのは、誰だったか。

まだ幼きその子供に刃をつきつけ、その言葉は発せられた。

天界の大地において、殺生は法度。

子供は、誰の目にも触れぬように部屋の一室に閉じ込められた。

そうしてでも噂は広まり、サアフィエルに呪われた子がいると天界中が囁いた。

デスピナ、と名づけられたその子供は、常に忌むような視線を向けられ続けることになる。

ダークブルーの翼など。

在ってはならない。

呪われた天使。

呪われた子供。

一族の恥。

そしてその事件は起きた。

「お願い、死んで。デスピナ」

デスピナを生んだはずの女が、狂気の瞳でデスピナに告げた。
目の前に落とされた長剣。

呪われているから。

呪われている子だから禁じられた自殺も出来る。

自殺なら誰も手を下してなんていない。

死んで死んで死んで。

いつまでも剣に手を伸ばさないデスピナに、女は何百回何千回と繰り返した。

女は完全に気が触れていた。

自分が生んだ子が呪われた子などと言われ続けて。

幾度その言葉が吐かれたか、記憶にはない。

何十時間と時間が過ぎていた事だけを、デスピナは憶えている。

剣の柄を、握った。

剣を振るった事などない、触った事すらない。

けれどデスピナは、「生まれながらにして」突出した力を持つ一族の子に変わりはない。

本能が、知っている。

「それ」の、使い方を。

金色の瞳で、狂った言葉を吐き続ける女を眺めた。

——キタナイ。

ぺろり。

舌が、静かに唇をなぞる。

「…苦しいんだったら助けてあげる」

ふふ、と、笑んで。

次の瞬間には、女は綺麗に縦に二つに裂けていた。

女の血が、びしゃりとデスピナの肌を濡らす。

生温い感触に、瞳を閉じる。

その瞳をもう一度開いた時、デスピナの瞳は紅に染まっていた。

天使が天使を殺したとき。

天使は堕天となる。

紅の瞳は——罪の証。

自分を束縛する鎖を剣で斬ると、デスピナはふらりと立ち上がった。
ダークブルーの翼が、ばさりと音を立てる。

それが合図になったかのように、デスピナは駆けた。

数十分後。

ザアフィエル家に、生存者はただ一名。

プラチナブロンドの髪。

血の如く紅い瞳。

宵に溶けるダークブルーの翼。

史上最高峰の剣の腕を持つ、破壊の天使最後の一人。

堕天、デスピナⅡザアフィエル。

数十名に上る死者を出しながら、それでも天使軍は彼女を捕らえた。
放りこまれた独房。

裁判、だなんて。

刑は分かりきっている。

墮天となったデスピナに下される刑など、極刑の他にない。

「結局死ぬんだよねー…この場合は消えんのか」

誰も聞く事のない呟きが牢に響く。

どうして殺戮を行ったかなんて愚問に答える言葉はない。

デスピナ自身、その答えを持っていないからだ。

ダークブルー。

望んでその色を持って生まれてきたわけではない。

呪われた子だ死ね消えろ。

はつきりと向けられたその言葉達。

悪意と殺意しか、なかった。

ただその言葉に屈する事が出来なかっただけ。
無性に募った苛立ちは。

全て、殺戮という行為に変わっていっただけ。

「なあーんか、納得いかないよね。癪だ」

ぶつぶつ。

感情のままに言葉を紡ぎ出す。

天使の翼は白。

誰がそんなことを決めた？

天使の瞳は金。

誰がそんなことを決めた？

天使の髪は銀。

誰がそんなことを決めた？

だったらその通りに自分を生み出せばよかった。

その通りに生み出さなかったのは、自分が殺した女。

母親という名の、狂った女だ。

「…逃げっかな。」

自らを拘束する鎖を眺めながら、デスピナは小さく呟いて周囲を見回す。

当然ながら、周囲に武器となりそうなものはない。

自分につけられているものはただの鎖と、魔力制御装置。

ずっと自分の右手に目をやる。

力を、込めてみる。

ばかり。

心地いい音を立てて、制御装置が消え失せた。

直後、右手に生まれる魔力剣。

「あーあ。拘束してるヤツの魔力に耐えられないような制御装置意味ねっつの」

けられ、と彼女は楽しそうに笑う。
そう、酷く、楽しげに。

剣を振るえば、デスピナを拘束する鎖は全て斬り落ちて。
さらにもう一振るい。

今度は独房の扉が壊れる。
音を聞きつけて現れる天使たちを、次々斬り殺す。

紅。

さあ、何処へ逃げようか。

「…誰？」

聞こえた声に、デスピナは魔力剣を握ったまま振り返った。
見えた姿は。

紅の髪、白と黒の翼、金と黒の瞳。

——ああ、「異端」か。

ぼんやり、頭の中でそんな事を思いながら。
デスピナは彼のいる独房を壊して、手を差し伸べた。

それは単なる気紛れか。

閉じ込められていた「異端」への仲間意識か。
：そんなことは、どうだって構わない。

「飽きたっしょ、ずーっとこんなトコ。アタシが逃げるついでに逃がしてやるよ」

1-3. Dark Blue

アメリカ、ロサンゼルス郊外。

カロン、デスピナ、エリヌスの3人は、そこで人間に混じって暮らしていた。

別段人間と関わる必要など、3人ともない。

理由をつけるならばそれはただ単純に、『暇潰し』。

天界でも魔界でもない場所を、楽しむ。

いつ終わるとも知れない、この場所にいられる時間を。

「エーリーヌースー、お隣のヴィヌリアさん果物がいっぱいくれたー」

「台所置いとけ、後で食べやすいようにしてやるから」

「今食べたいっ」

「…俺は今手が離せないんだよ」

「もー、仕方ない、アタシがやってあげようじゃないか!」

「…や、デスピナはいいや」

僅かに引き攣った笑顔で拒むカロンに、む、とデスピナは眉を寄せ
る。

その足は既に台所へと。

果物が大量に入っている籠を大事そうに抱えて、カロンはぶんぶん

と首を振った。

「なーにそんな嫌がる事があんの。綺麗に切ってあげるってー」

「デスピナのは切るって言わない。斬るって言う。ざっくざくに。ばらっばらに。食えない。」

「……」

「残念ながら俺も同意見だぞ、デスピナ」

「うっさいアンタは黙ってな」

「黙ってたってもうお前が切るわけにいかないだろ。ほら貸せ、カロン」

やっていた作業から手を離れたエリヌスが、足早に台所へ足を踏み入れ。

そのまま包丁を取り出して、カロンを手招きする。

渡された果物を切るエリヌスの手元を楽しそうに眺めるカロンと。

その表情とは正反対に、不機嫌な様子で2人を眺めるデスピナ。

くだらない事を言い合っている時間は、そうない。

カロンとデスピナは、天使軍に追われている身。

何時襲撃されてもおかしくない。

それでも軽口を叩いていられるのは。

「負けない」という、絶対的な自信。

天性の剣の才能を持つデスピナと。

上級悪魔の位に位置する力を持つエリヌス。

雑魚では———相手には、ならない。

「ん、どうぞ」

「さーんきゅ。おー、盛り付けが芸術的」

「それくらいアタシにも出来るっつのー」

「いやだからデスピナがやったら」

「さっさと食わないと傷むぞ、カロン」

「あ、そーでした。」

ぽん、と手を打ってカロンはオレンジに手を伸ばす。

美味そうに噛り付くカロンを尻目に、デスピナはやれやれと溜め息をついた。

作業に戻ったエリヌスの背中を目で追いかける。

エリヌスがいるのは、リビングを覗ける広めの部屋。

一見何もないように見える、けれど――デスピナには、見えていた。

そこに『何』があるのかを。

「…お人形さんの整備？」

「ま、そんなとこだな」

「天使の人形とか趣味わっるー」

「お前も人形にしてやろうか？」

「死んでもヤダね。何でアンタなんか動かせなきゃなーんなーいのー」

「冗談だ。俺だってお前みたいな人形はいらないよ」

「…どーゆー意味？」

「そのまんま」

「刺し殺すよ」

「物騒な」

ははっ、と楽しそうにエリヌスは笑った。

その指先は、柔らかく動き続けている。

何をしているのかまでは、デスピナには分からないけれど。彼の實力は、嫌というほど知っているから。

軽口を叩きながらも、相当集中しているのだろう。

ふー、と息を吐いてからデスピナはカロンを振り返った。そのまま、硬直。

「…………カロン」

「んあー？なにー？」

「アンタ食うの早すぎだろ。」

「美味いんだって、デスピナも食べる？」

「いや、もうないし」

「…あ、ホントだ」

すっからかんになった果物が盛り付けられていた皿を見て、デスピナはもう一度溜め息をついた。

宵刻。

ダークブルーの翼を広げて、デスピナは空へと翔んだ。まだ僅かに明るい空の色を見ながら、デスピナは1人、探す。自分を追う者を。

狩り取る。

天使という存在を。

異種の存在を受け入れない者達を。

そうする他に、術はない。

自分を存在させる方法は。

：そこまでして自分を存在させる意味も、ないのかもしれないけれど。

ふと、動きを止めた。

ばさり、大きく羽ばたいた翼からゆらりと一枚羽根が落ちる。

ダークブルーが、空に溶けて。

ゆっくりと、消えていく。

「：へえ。1人でアタシんとこ来るとか、大した度胸のある天使もいたもんだね」

独り言のように呟いて。

ほとんど何も考えることなく、手の中に力を生み出す。

迅速に、確実に。

生まれたのは、使い慣れた蒼の剣。

翼と同じ色の、デスピナの魔力のみで構成された剣。

振り返る。

頭上に翳せば、ぶつかり合う音と共に加重。

身体を後ろに引いてから剣を退け、そのまま蹴りを放ってその反動を使って相手から離れた。

目の前に広がるのは、白い翼。

——天使。

見飽きた。

白い翼で。
銀の髪で。
金の瞳で。

変わり映えのしない。

どれも同じ、『天使』という名前の個体。
鬱陶しい。

目の前の天使は、デスピナと対峙した状態で笑みを浮かべていた。
気に喰わない、笑顔。
まるで上から見下すような。

「…エラッソーなヤツ」

舌打ちと同時に、独り言を零す。
ここで、殺す。

でなければ、捕まって天界に戻されて。

行き着く先は極刑、消滅——それだけは、何となく避けたい。

目の前の天使は、興味深そうにデスピナを眺めて。
ゆっくり、口を開いた。

「デスピナ!! ザアフィエル、ね。うん、確かにお前、強そーだなー」

「…あー? 強そう、じゃなくて強いんだっつ。何十人殺したと思
ってんの?」

「死者32人、重傷147人。よく知ってるよ、お前がやってきた
事は」

にここにこ。

この場には不釣合いな、笑顔。

ちら、とデスピナは天使が手にしているものを見る。

そこにあつたのは、自分と同じ、魔力によって生み出されたであろう剣。

綺麗な銀の―――天使の髪と同じ色。

すつと剣を構えて、デスピナは真っ直ぐに天使を睨む。

目の前の天使は、一見無防備で。

けれど、全く隙がない。

剣を持った手は、いつ攻撃してもすぐ反応できる位置にある。

その位置を、デスピナはよく知っている。

自分もよく使う、その位置。

苛立つ。

「一回会ってみたくてさ。直々に上に頼んで来たわけ。」

「…あ、そ」

「上には止められたんだけどなー。オレが死んだらどーすんだー！
って感じでサ」

「死にに來たんなら殺してあげるよー？痛みを感じる時間なんてなしで。アンタが抵抗しなきゃの話だけど」

「やだね。しかし、まー…」

じろじろと。

興味深そうな目で、天使はデスピナを見回す。

居心地が悪い。

まるで、挑発されているかのように。

…実際、挑発されているのだろうと思う。

堪える。

ここで感情的になれば、そこで敗北。

それを、知っている。

「ああ、そーだ。自己紹介」

「いいよんなもん。アンタはここで殺しとくし」

「イオⅡラグエル、監視者な」

「って人の話聞いてんの？アンタ。」

「今日はお前にひとつ言いに来ただけだから捕まえる気も戦う気もねーの」

「んじゃさっさと行ってアタシに殺されな」

「やだ」

べ、と舌を出して天使——イオは答えて。

そのまま、更に笑んだ。

自信たっぷり。

そして、その言葉は吐き出された。

「お前さー、俺の女になれよ」

1-4. 紅の交錯

「アンタバカ？」

ふ、と全身から力を抜いて。

デスピナが発した言葉は、たったのそれだけ。

イオはくすくすと楽しげに笑って、手の中にあった魔力剣を消した。戦うつもりのない意志表示であり、突然デスピナに襲われても対応できるという余裕の表れ。

その態度がまた、癪に障る。

「なんっでこのアタシがアンタみたいな腐った生き物代表の天使の女になってやんなきゃいけないんだっつーの鬱陶しい。戦って勝てないしもしアタシがアンタに惚れたらおとなしく天界に行くかもしれないしいいテかもしれないけどねー、アタシはアンタみたいなダイツキライ」

「厳しいなー。でもお前が嫌いなのは俺じゃなくて天使だろ」

にこやかに。

笑顔を崩さぬままに、イオは告げる。

デスピナはゆっくりと眉を寄せた。

天使というだけで吐き気がする。

他者を受け入れない、異物を受け入れない、あの閉鎖的な環境に苛立ちが募る。

綺麗で美しく穢れがないなんて所詮幻想。

本当の姿は何よりも醜くて、何よりも汚い。
他の天使の目ばかり気にするような点も。

群れなければ自分を捕らえに来られないような弱さも。

——自分の娘ですら、自分の名誉の為に殺そうと出来る神経も。

大嫌いだ。

そんな思考に占領されながら、デスピナはイオを見つめた。
瞳に憎悪を込めて。

受け流すようにイオはその視線を無視して、不意に表情を真剣なものに変える。

「ラグエル家のことって、お前知ってる？」

「：べつつに？興味もないし」

「監視者・ラグエル。俺らってさ、一種墮天なんだわ」

「：は？」

「天使が墮天しないよう見張るのが仕事。罪を犯した天使は糾弾するし、万が一目の前で墮天しようとする者がいたら、それを阻止する為に」

「：相手が天使であっても、抹殺する？」

「イエース、ピング。そういう事」

軽い口調でそういうイオはしかし、黄金の瞳をしている。

それは天使の証。

天使の血を浴びた者は、その瞳が紅に染まる。

デスピナはその事を身を持って知っている。

だから、とてもじゃないけれど。

「だから何」

信用には、値しない。

天使など皆同じ。

信用も信頼もしない。

天使なんかより、悪魔の方が――エリヌスの方が、余程信用も信頼も出来る。

それはデスピナ自身が墮天であり、闇に近しい存在だからか。彼女自身では分からないことでは在るけれど。

「…そんなら、これで信じてくんね？俺の事」

困ったようにイオは笑って、ゆっくりとその瞳を閉じる。瞬間、彼を取り囲む風にデスピナは剣を構え直した。

だが次の瞬間。

彼女はその瞳を疑う事となる。

「…ただいまー」

「おかえりーデスピナ。今日は早いね」

「やる気殺がれた」

「なになに、何があったのー」

家に帰るなり寄ってきたカロンを振り払うように、デスピナは自室に向かう。

デスピナの機嫌が悪いことを察知したエリヌスが、カロンの腕を掴んで引きとめた。

文句を言っているカロンの声を背後に聞きながら、デスピナは部屋に入ってベッドに倒れこむ。

自分の目で見たものが、信じられなかった。

今までの自分を根底から覆されたような気分。

どうして自分は迫害されなければならなかったのか。

どうして存在を否定され続けなければならなかったのか。

それが、分からなくなってしまった。

イオは恐らく、デスピナに対して1つも嘘をついていない。

あの状況で嘘をつくメリットが、彼にはなかった。

デスピナを殺しに来たわけでも。

捕らえに来たわけでも、ないのだ。

あの、イオⅡラグエルという天使は。

コンコン、と控えめに扉がノックされる音。

返事を返さずに黙っていると、扉のノブが回った。

侵入者は、エリヌス。

椅子を見つけると勝手に腰を下ろして、デスピナの方を眺める。

「…だーれも入っていないってないんだけどなー、エリヌス？」

「許可を求める為にノックした訳じゃないからな。これは強制」

「何で」

「お前に拒否されたと思ってカロンのバランス崩したらどうするんだ」

「あー：そっかそっか、それはゴメン」

不意に脳裏にカロンの笑顔が浮かんで、消える。

あの笑顔は、保たせなければいけない。

崩させてはいけない。

それは、デスピナとエリヌスの間で取り決めたこと。

それは、守られなければならない約束。

さして興味もなさそうにデスピナの表情を眺めていたエリヌスの指先が、規則正しいリズムを刻んでいる。

それが気に入らずに思わず睨みつけると、エリヌスはすぐにリズムを刻むのを止めた。

「：睨むなよ」

「人形使ってるみたいだからアンタが指先動かしてんのってすっごいキライ」

「ただのクセだろ、気にするな」

「気になるんだっての」

「なるべく気をつけるよ、お前の前では。：で？」

何があったかを促すその言葉に、デスピナはあからさまに顔を顰めた。

何と言えがいいのか、よく分からない。

困惑の色を込めた溜め息を吐けば、エリヌスが苦笑する。

「言にくいか」

「隠すような事じゃないんだけどねー、ちょっと」

「それならまあ、仕方ないか」

「：あのさ」

「ん？」

「異端の色の天使、アタシだけじゃないっぽいよ、どーも」

その言葉に、今度はエリヌスが怪訝そうに顔を顰める。

異形。

それ故にデスピナが天使ではなくなった事を、墮天する理由になった事を、エリヌスは知っている。

ダークブルー。

宵の色の翼を持つ、天使。

故に迫害され、堕ちた天使。

「…どうということだ？」

「今日、会った天使が…まあ、ラグエルの奴だったんだけど」

「ああ、『監視者』か」

「知ってんの？」

「お前よりは天界事情に明るいさ」

「…まあ、そりゃそうか。ソイツの色、最初は銀と金の白翼でさー、ウツトイ天使の色してたの」

「ああ」

「ホントの、色がさ」

「本当の色？」

「普段は魔力で色を天使の色にしてるだけなんだって」

「へえ。それは初耳だな」

「マジ？」

「本当に」

「…んー、まあ、それで。ソイツさ、銀髪紅瞳紅翼だった」

「…！」

言葉にしても、まだ、信じられない。

魔力で色を変える事が出来るなら、色を隠す事が出来るなら。

故意にそういう風に変えることも、出来るはずなのだ。

けれど、デスピナの前でそれをする意味はない。

どちらにしろ天使。

デスピナが憎悪する対象には変わりなくて。

それでも。

「∴アタシもそうやって、天使として生きていったのかな」

吐き出した言葉に、エリヌスは何も答えなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2492b/>

Concerto

2010年12月19日01時33分発行